

現代へ連なる理想形

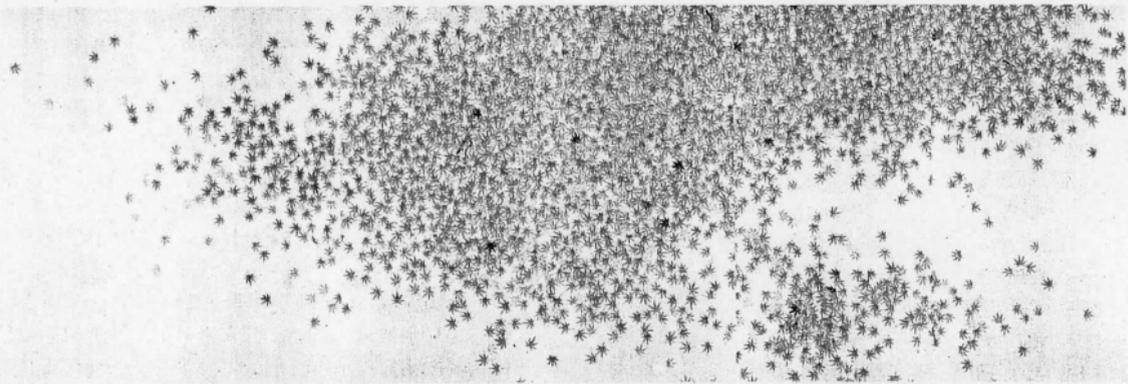
昨年は、思想家、岡倉天心の没後100年。今年は、天心の薫陶を受けた横山大観や下村観山らが日本美術院を再興してから100年。昨年から、天心や院展画家を特集する展覧会が全国で相次いでいる。

成で、前半は五浦に赴いた大観と観山、菱田春草、木村武山の作品、後半は現代作家の絵画を紹介。ポイントが絞られ、明快な展覧となった。

そのポイントとは「ぼかし」。輪郭線に頼らず、色の微妙な変化で画面をつくる試みで、「朦朧体」と酷評されたことは有名だ。「朦朧体」につながる4人の名作をそろえ、色面表現が深化する過程を見せた。

天心の思い描いたもの——ぼかしの彼方へ

美術評



神戶智行「溢れる灯」2013年、作家蔵



下村観山「大原之露」1900年
茨城県近代美術館蔵

「ぼかし」が意図するのは、すべてを描き尽くすのではなく、鑑賞者の想像力を促す未完成な部分をつくる点にあるという。観山の「大原之露」は、人物の視線で物語が動き出したことを暗示する。その後、天心が軌道修正をはかり、春草や武山が「琳派」へ接近した点も興味深い。

現代画家15人の作品を紹介する第2部で、墨による絶妙な「ぼかし」が際立つのは、園家誠二と浅見貴子。繊細な描写に極薄の和紙を重ね、洗練された画面を構築する神戶智行の作風は、天心が「ぼかし」後に求めた世界に近いかもしれない。インドネシア生まれの濱田樹里は、鮮烈な色彩と大画面で、天心の理想から軽々と飛躍してみせる。

21日まで、水戸市千波町の同美術館。【岸桂子】